

Title	柳田國男の教育観形成に関する一考察： 農政学期から民俗学期への連続性に着目して
Sub Title	Establishing process of Yanagita Kunio's educational theory : the sequence between his agricultural policy and folklore
Author	渡部, 恭子(Watanabe, Kyoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.129 (2012. 3) ,p.189- 207
JaLC DOI	
Abstract	<p>Folklorist Yanagita Kunio, said to be the founder of folklore in Japan, left a lot of suggestive works in not only folklore but also pedagogy. He accepted and advocated the value of the early modern education, especially folk-narrative, and then criticized an inclination not to acknowledge the existence of the early modern education because of thinking that "education" began in the modern age.</p> <p>It is considered that his educational theory changed greatly in the 1900s. When he was an official of the Ministry of Agriculture and Commerce, he seemed to try to have a civilizing influence on farmers in his agricultural education. It was closely similar to the modern education. However, in the 1910s and later, he gave it up and started to educate young people in a different way. He encouraged them to learn their local history. It is needed to make clear whether his educational theory changed or not, and the sequence between those two education.</p>
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000129-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

柳田國男の教育観形成に関する一考察

——農政学期から民俗学期への連続性に着目して——

渡 部 恭 子*

Establishing Process of Yanagita Kunio's Educational Theory: the Sequence between His Agricultural Policy and Folklore

Kyoko Watanabe

Folklorist Yanagita Kunio, said to be the founder of folklore in Japan, left a lot of suggestive works in not only folklore but also pedagogy. He accepted and advocated the value of the early modern education, especially folk-narrative, and then criticized an inclination not to acknowledge the existence of the early modern education because of thinking that “education” began in the modern age.

It is considered that his educational theory changed greatly in the 1900s. When he was an official of the Ministry of Agriculture and Commerce, he seemed to try to have a civilizing influence on farmers in his agricultural education. It was closely similar to the modern education. However, in the 1910s and later, he gave it up and started to educate young people in a different way. He encouraged them to learn their local history. It is needed to make clear whether his educational theory changed or not, and the sequence between those two education.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻（博士課程）

はじめに

教育学において、民俗学の創始者と称される柳田國男(1875-1962)が注目されるに至ったのは、柳田が自身の習俗研究において教育という営みの重要性を認識し、教育について数多くの言及を重ねていたからに他ならない¹。明治初期に生まれ、近代学校教育の導入を目の当たりにした柳田は、やがて近世以前の教育、すなわち前代教育に視線を注ぎ、「教育」という営みが近代に始まり、すべてが西洋から輸入されたかの如く捉える見解に対して異議を唱えた。柳田が創出した民俗学では、前代の習俗にみられる教育的営みの解明が目指され、詳細な調査に支えられたその研究成果は、教育学においても、文字に遺されなかった前代教育を描出する上で示唆に富むと評されている²。

こうして前代教育の特性を把握し再評価することにより、近代教育の有り様に対して検討を迫った柳田であったが、柳田の教育観の成立期や契機に関しては、未だ定説が得られていない。これまでの教育学における先行研究では、前代の習俗を研究対象とした民俗学の創出から、そこで得た成果を教育実践へと反映させる取り組みに至るまでの柳田の知見ばかりが評価され、それ以前の農政学期における柳田の教育観は近代的であると見なされ、評価の対象からは外れる傾向にあった。これまで研究対象とされてきたのは、民俗学確立期といわれる1930年代以降が中心であり、それ以前にみられる柳田の教育観については依然として検討の余地が残されている。柳田の教育観を吟味するとすれば、その萌芽の可能性は農政学期において盛んに言及された農業教育にまで遡り、民俗学期の範疇に留まらない長いスパンでの検討が求められる。

柳田が自身の取り組みにおいて積極的に「教育」という語を用い、教育の重要性を声高に提唱し始めるのは、1900年代から柳田が従事した農政学においてである1900(明治33)年に東京帝国大学の法科大学政治科を卒

業し、卒業論文で「三倉」の研究³に取り組んだ柳田は、同年農商務省農務局農政課に入省した。そこで、農民が貧困から脱する策を講じ、その対策法を全国各地の農村に浸透かつ定着させるべく尽力することとなる。柳田は、目まぐるしく発展する外界市場に敏活に適應することが求められる世情において、農民が依然として因習的な生産方法を踏襲するに留まり、「時勢を観察するの機会を有せず、経済界の変遷に適應するの方便に乏しく、一方には内外の競争の最猛烈なるものに遭遇せるを以て、其弊を被る」⁴ ことを危惧した。そこで、「農業労力ノ改良」策として、「職業トシテ農ノ新ナル経営ヲ為スニ当リ之ニ要スル智識ヲ供給スル」⁵ ことを喫緊の課題と見なし、農業教育を積極的に支持したのである。

以上の内容を踏まえ、本稿では、柳田の教育観の全体像を明確にする一過程として、柳田の農政学期から郷土研究および民俗学確立期への連続性に着目する。先行研究において、そこに連続性が見出されているのか、あるいは断絶と見なされているのかを考察し、今後柳田の教育観がより長いスパンで把握される可能性を探りたい。

1. 柳田教育観の発見

以下に、これまで蓄積された教育学における柳田研究を取り上げる。諸研究を時系列に沿って辿ることにより、柳田と「教育」との接点がまずは彼の民俗学において見出され、彼のもつ「教育」への強い関心の根源を探るべく、民俗学を確立する以前の彼の取り組みへと視線が注がれていった経緯が浮かび上がるであろう。また、社会科教育や郷土教育といった特定分野に囚われることなく、柳田の教育観全体を見通すことを意図した先行研究に注目していく。

柳田の民俗学と「教育」との看過できない関連性を早期に指摘した岩永久次によると、柳田による学問研究は日本民俗学において「柳田民俗学」

「柳田学」といった固有名詞で称され、特異な位置を与えられてきたという。その理由のひとつとして、岩永は「彼（柳田：引用者註）の課題意識の中核に『教育の民俗』研究ともいべき視点が大きく据えおかれていたこと」⁶を挙げている。岩永はそうした柳田民俗学の個性を明らかにする中で、柳田の有する学問の使命感に着目する。柳田は「平民の過去を知ること」を郷土研究の第一義とし、「彼（柳田：引用者註）の発想は、時代の変遷を知ることが、やがてよりよき変革を可能にするという自信に根ざすものであり、それが彼の学問に一貫する筋金であった」⁷と岩永は述べている。この指摘は、以下の柳田の著述や講演における発言をみても明白である。

現在の生活諸相はよいにつけ悪いにつけ、必ずこの邦限りの原因があつて、それは『原因』だから必ず過去の中に在る⁸。

現在のこの生活苦、若くは斯うして争ひ又闘はねばならぬことになつた成行を知るには、我々の持つ所の最も大なる約束、即ち此国土この集団と自分々々との関係を、十分に会得する必要がある。それを説明する鍵といふものは、史学以外には求め得られないのであつた⁹。

柳田のいう「史学」とは、「『昔は斯うであつた』を明らかにするを以て先途とし、……尚歴史化とか過去に属すとかの語を使つて、強いて現在の利害と引離して眺めようとする」¹⁰ 従来の姿勢ではなく、一方、「『今』の理由としての前代を説」くが、「その資料の整理選択に、驚くほど疎慢であつた」¹¹ という当時若い学者の間に盛行した姿勢に基づくものでもない。柳田が信条とした研究姿勢は、以下の著述に示されている。

その（研究の：引用者註）傍らに種族と時代に共通した問題を認め、

その解釈を目標として進んで行くか、それが出来ない迄もせめて自分たちの討査が、一つの大きな学問の何れの部分を占めて居るかを知つて、その総合意識の下に力相応の分担を続けるので無ければ、世を益し国恩に報いることが出来ぬのは固より、退いて個々の一郷土の幸福を策するといふことすら、むつかしいやうな感じがする¹²。

この姿勢に立脚した柳田の郷土研究は郷土教育に直結し、新しい社会を担う青年たちに土着の歴史を教えることで、彼らの主体形成を志していく¹³。このように柳田の学問では、研究対象が過去の事象として隔離されることなく、現状の抱える問題を解決する術として認識され、人々にその有用な知識を提供するという教育的役割が学問の支柱に据えられていた。ただし岩永は、柳田が自身の学問の起点としてきたのは郷土研究であると付言しており¹⁴、それ以前の農政学期については考察対象とされていない。

その後、柳田の解明した前代教育を積極的に評価し、その全貌を先駆けて俯瞰した庄司和晃の研究が、教育学における柳田研究の大きな契機となる。庄司は、まず柳田の「人生観・学問観の根幹」¹⁵として、柳田の論考「郷土研究と郷土教育」より「疑惑は我々の世に生きる武器だ。何物の威力も我々の物を訝がる心、自ら教へようとする念慮を抑制することは出来ない」¹⁶という著述を引用している。柳田の学問的営為はすべて、この「強靱な問いかけの精神」より発していると庄司はいう¹⁷。柳田は、「各自の生活からにじみ出た自然の疑惑こそは、学問の最も大いなる刺激である」¹⁸とし、人々の生活から自然に浮上する疑問に特別な関心を払っていた。そして、その疑惑に答えてくれるのが歴史であると柳田は主張する。「今日の世の中のさまざまな現象には、原因が無くて斯うなつて居るものは一つも無い」¹⁹とし、「さういふ原因はすべて皆歴史の中にある」²⁰という点に気づかせることが、歴史教育の役目だとしている。この「昔の事

実を知りたいといふ念慮、もつと自分々と関係のある事を、出来るだけ詳しく知りたいといふ向学心²¹の事を、柳田は「史心」と呼んでいるが、その史心の養成に「柳田の教育観の核心」があると庄司は指摘している²²。庄司の研究は、柳田が探究した前代教育に焦点を据えており、柳田の教育観そのものがいかにして形成されたのかという点は明示されておらず、農政学期に対する言及もみられない。

このように、当初教育学の柳田研究においては、専ら郷土教育以降が取り上げられる傾向にあった。

2. 多様な柳田教育観

1980年代に入ると、森田政裕は、柳田の所説において「前代教育」と「近代教育」という二元論的な把握に留まるのは不十分な理解であるとし、庶民の伝統的教育といえども改良が積み重ねられ変遷があったものとして捉えるべきであると先行研究を批判した²³。森田はその際、「柳田は教育の問題に何故関心を寄せるに至ったのか、その問題意識ならびにそこに起因する教育論の特色²⁴」を検討している。柳田の教育に対する論究は既に農政学期にみられ、農業教育がその中心を占めた。しかし、そこで柳田が論じたのは「各種の学校や講習会等の公的機関による制度的農業教育」に限られており、「伝統的な庶民教育が視野の内に組み込まれるのは、やはり庶民の生活諸相の歴史の変遷を明らかにしようとする民俗学的方法の確立をまたなければならなかった」と森田はいう²⁵。そして、柳田は農民の貧困や離村といった農村問題に農政学をもって対応しようとして挫折し、「経済合理性の論理では割り切れない先祖崇拜の信仰に代表される庶民の日常生活を貫く論理を、歴史的視角から解明することに研究の焦点を転換」したと分析する²⁶。この農政学期における柳田の挫折について、柳田自身は後の民俗学確立期に、以下のように述懐している。

私は元来が農民史を専攻してみようと思つて、学問を始めた人間である。今でもこの方面に知友は多く、また農村近年の出来事に対して、最も深い関心を抱いて居る。眼前にこれほど多くの問題を見せつけられ、また遣瀨ない苦悩の声を聞きながら、何等の献策を以てこれを救ふことも出来なかつたのは、学徒としてこの上もない恥辱ではあるが、自ら弁疏すればこれは微力に比して問題があまりにも大きかつたことと、二つには世上の常識なるものが私たちのとは別で、共通の立場に立つて異見を闘はず途がないためであつた²⁷。

このように農政学期での限界について弁明した柳田は、新たに提唱した郷土研究において、改めて自身の見据える教育の問題を数点挙げて居る。一つは「何が以前の教育の中には具つて、今日は既に欠けて居る点であらうかといふ考察」、二つ目は「農村道徳の昔はあれで備はり、今でこれでは足らぬといふ理由、及びそれを成長せしめまた支持してゐた力の所在」、三つ目は「その婚姻の障害に基づくと認められる離村問題」である²⁸。そして、それよりも「もつと痛切なる」根本問題として、「何故に農民は貧なりや」という問いを掲げていた²⁹。ここで森田は、「郷土研究の立場を保持しながらも、柳田の究極的な問題意識がなお農民の貧困とそれに起因する離村問題にあつたこと」³⁰に着目している。つまり、農政学から脱却して民俗学の確立を目指す柳田は、農政学以来の問題意識を引き継ぎ、庶民の生活の歴史的変遷を解明することを通じて、「生活領域の側から農村問題を追求しよう」³¹としたのだ。森田は、その「実践的志向性」が柳田の教育論の特色であると指摘している³²。

長浜功のまとめた『常民教育論』³³も、特定の分野に限定することなく柳田の教育観の全容を捉えようとした研究であるが、柳田の学問と教育との関連を論じる際、それまでの先行研究とは異なる見解を示している。長浜は、初期および中期の柳田学は明らかに「民俗学創成の諸論をめざして

いった」のであり、「柳田が自分の仕事を教育だと認識するのはやや乱暴にいつて晩年のことである」とし、「教育をハナから意識したのではなく、登りつめた道をふり返ってみると教育学になっていた」のだと認識している³⁴。ただし、「柳田は最初から教育論を目指したのではなかった」³⁵とした上で、それでも柳田の築き上げた学問から彼の教育観や教育論を汲みとることができるかと主張する。その根拠について、長浜は「何よりも柳田という人は人間そのものに対する限りない探求心を生涯抱き続けた。……教育はすぐれて人間に関する総合的な探求の学問である。柳田学がひときわ教育の領域に重なり合うというのもそもそもは端を人間から発し、人間に結び続けた学問であったからにはほかならない」と述べている³⁶。しかし、柳田の学問自体が内包する教育に対する問題意識や教育観についてはほとんど関心が払われていない。

3. 農政学期の柳田教育観

柳田の教育思想の成立過程に焦点を据えた森本芳生・齋藤浩志は、とりわけ農政学期に注目し、当時農政学界の中心人物であった横井時敬³⁷の農業教育論との比較を試みている³⁸。森本らは、農政学期を含めて柳田の教育思想を捉え直し、「農政学から民俗学へという研究対象・方法論の転換を、柳田の〈教育〉思想創出の一大起点として位置づけること」を目指した³⁹。換言すれば、それは「日本の農村社会を政策によって変革していくことをめざした柳田が、そうした方法を放棄」し、「日常生活の変革を基礎として社会変革を目指」すに至ったという「変化」に、柳田の教育思想の萌芽を抽出する試みであるという⁴⁰。ここで森本らが着目したのは、「農政学と民俗学との断絶の側面」およびその後の「思想的転換」であり、柳田が「『無知』なる人間の蒙を啓いていくという啓蒙主義的な教育観をふり払うこと」は、「柳田における人間観の革命的变化をとともなう出来事である」と捉えている⁴¹。

森本らの分析によると、柳田の農業教育論は、横井のそれとは一線を画すものであった。当時日本の農村社会が自然経済から貨幣経済へと変化していく中で、横井は、離農者の増加を抑え農村にとどまらせるために、農村への貨幣経済の浸透を「農村荒廃」と見なし、商工業に対する農業の優位性を観念の次元で強調した。そして、都会的、資本主義的、商工業的な人材養成を志向する近代学校教育を批判し、地主や小作人各々の分に応じた教育機関を設定し、農業を続けさせるための精神教化を主眼とする教育を構想していた。それに対し柳田は、農村が社会の変化に積極的に適応していくことを目指し、農業が近代資本主義社会において、商工業とバランスをとって並立し得るひとつの「企業」として確立することを企図していた。柳田にとって「農業労力ノ品質上ノ退歩」⁴²こそが「農村荒廃」であり、農業生産や経営のあり方等その「品質の改良」「労力改良」⁴³を担う資質形成を農業教育の責務とし、それを組織的、計画的に成し遂げる主要機関として学校に期待したのである。

そうした柳田の農業教育論を踏まえた上で、森本らは、この時期の柳田の教育観は「きわめて『近代的』な性格をもつものであった」⁴⁴と指摘している。例えば、その特徴のひとつとして、「農政学時代の柳田は、その学問研究の性格上『国家の立場』にたつ政策論・制度論を展開することが多く、人間の内面・精神の問題への言及は民俗学時代と比較するときわめて少ない」点を挙げている⁴⁵。さらに、中でも際立った特徴として、「啓蒙」という性格を重視する。森本らは、柳田がヨーロッパの科学・生産技術の進んだ状況に比べて『遅れた』日本の農民を『啓蒙』していくという立場にたっている」と主張している⁴⁶。この農民に対する「啓蒙」という姿勢を有する限り、民俗学確立期にみられるような教育観は生まれ得ないとし、次のように述べている。「民俗学時代の独自の〈教育〉論が展開されるには、日本の農民の状況を『遅れた』ものとみなし、それに対して『進んだ』科学を一方的に教える必要があるとする農政学時代のこの教育

観が崩れることが必要なのであった」⁴⁷。確かに、当時の柳田が目指した農業教育には、いわゆる上から下へと一方通行で知識を伝達するという、まさに近代学校教育らしい態度が顕著にみられる。ただ、当時柳田はこのような態度のみを「教育」として見なしていたのであろうか。この時期柳田が喫緊の課題とした農業における資質形成は、いわゆる前代教育のような営みでは果たし得ない目標を掲げていた可能性はないだろうか。次に取り上げる関口の研究において、もう少し検討してみたい。

これまでみてきた通り、どの先行研究からも共通して見出せるのは、柳田の教育観と彼自身の学問は密接に結びついており、切り離しては考えられないという点である。その両者の関係性を正面から研究課題に据えて解明に取り組んだのが、関口敏美の研究である⁴⁸。関口は、柳田の教育観を彼自身の「学問」の展開と関連づけて検討することを目的とし、柳田の教育観の形成過程を三期に区分することで、教育観の「変化」を論じた。関口の指摘する教育学における柳田研究が抱える問題点は、次の三点である。第一に「教科教育論にせよ、習俗にせよ、個別に論じられることが多く、柳田の全体としての教育観・教育構想との関係や各領域間の相互的な関係が問われていない」⁴⁹点、第二に「柳田の『学問』それ自体が持つ教育的な意味や教育的な性格について注目していない」⁵⁰点、第三に「教育観を彼の『学問』との相互作用の中で『形成されてきたもの』とみなす観点が希薄である」⁵¹点である。関口はこれらの問題点を克服すべく、農政学期から民俗学確立期に至るまでの教育観を、学問との関わりの中で論じた。このような試みは、柳田の所説の根底にある教育観を把握し、諸々の分野間の相互関係を明らかにする上で有益であろう。

関口の分析によると、柳田の教育観は初期の農政学時代、移行期の「郷土研究」時代、確立期の「義務教育の条件」⁵²以降（1931年～）に分けられ、柳田は農政学期には教育を労力改良の手段としか捉えていなかったが、1910年代に始まる「郷土研究」を経て青年の主体形成に対する関心

を深め、確立期では民俗学において前代教育の価値を見出すに至ったとしている。つまり、柳田が自身の学問展開に沿って次第に教育を重視していくと共に、「教育観そのものを変化させてゆく」⁵³ 過程を描出したのである。

ここで関口は、農政学期の教育観を「この時期（農政学時代：引用者註）の教育のとらえ方には、後の時期にみられるような学校教育に対する疑念は見当たらず、上からの学校教育や産業組合の啓蒙的な役割に対しては積極的な意味を見出していた」⁵⁴ と考察している。また、後に柳田が重視し研究対象とする前代教育についても、「消極的な評価を下していたにすぎない」と主張する⁵⁵。確かに柳田は、当時農業教育の中心的役割を担うものとして、学校教育を挙げていた。「学校の教授は若し其方法の宜しきに合するものあらば、能く智力開発の方向を統一し、人類進歩の機会を平等ならしめ、国家存立の基礎を安固ならしむ」⁵⁶ とし、「大多数の人民に必要な智識を付与するには、之（学校の教授：引用者註）を措きて他に手段の存するものなし」⁵⁷ と、学校の存在に大いなる意義を見出している。この場合柳田の想定する教育とは、国家が統一的に国民に施す教育政策そのものであったと考えられよう。また、農民による従来の方策に対して「況や毫も教育の意志を有せず、単に父兄の農場に在りて狭隘なる見聞を取捨するが如きは、平穏静止の時代に於ても猶屢々満足なる結果を見るに能はず」⁵⁸ と評していることから、関口は、後に前代教育に価値を見出した柳田の教育観と比して、そこに大きな隔たりがあると見なしている。

ただし、上述のような国家による教育に対して柳田は「勞力ノ改良ハ亦其大体ニ於テハ各個人自身ノ努力ニ須ツヘキモノ多キハ論ナシ、唯個人ノ力カ自ラ決スルコト能ハサル部分ニ就キ国又ハ公共団体ノ政策ハ其力ヲ施スナリ」⁵⁹ と発言しており、主力は農民各自の努力であって、国家の干渉は最小限に抑えられるべきであると考えていた⁶⁰。それは、柳田があくまでも「農民ヲ本位トスル教育」⁶¹ を目指したことに起因する。柳田は農商

務省に勤務し全国の農村の実情を調査する中で、学校で教えられる知識が農業者の求めるものと必ずしも合致しない状況を看過せず、小学校教育に対し「都鄙統一ノ学制ニハ一面ノ弊アリ」⁶²と批判していた。当時の小学校には、農業教育を受ける下準備をするために必要な「小学校ト農場トノ連絡」や「農村事物ニ対スル注意心の養成」など「一見簡単ナル用意モノノ小学教育ニハ十分ニ存在セス」⁶³とし、近代学校特有の画一的な教育には疑問を呈している⁶⁴。このように、柳田は当時学校教育に対して何ら疑念を抱かなかつたわけではなく、また、国家の干渉は最小限であることが望ましいとしているため、農政学時代と郷土研究時代との間に、柳田の教育観の単純なる断絶を認めるのではなく、より精緻にその推移を描出する必要がある。

谷川彰英は、柳田の教育観あるいは学問観全般を論じるというよりも、あくまでも社会科教育を中心に、それに関連して歴史教育、郷土教育、地名教育、生活科教育を論じている⁶⁵。しかしその中で、社会科教育論の背景として教育思想の形成過程を描出する際、柳田の教育論の原型はすでに農政学時代にあったと主張していることに触れておきたい⁶⁶。その根拠として谷川は、柳田の著書『農業政策学』の中に「昭和に入ってから戦後に至るまでの柳田國男の教育論の真髓が、ほとんど全てが揃っている」ことを示している⁶⁷。そこに挙げられた「真髓」とは、第一に「史心の育成」（「注意心の養成」）、第二に「居所」という起点（自分の身近な問題から出発しなければならないことを強調）、第三に「世相解説の学」の萌芽であった⁶⁸。ここでは、柳田の農政学と民俗学との繋がりが積極的に提示されている。

最後に、福井直秀は、柳田の生涯にわたり「社会変革構想と関わっていた教育思想」⁶⁹を検討している。福井は、「柳田改革構想の中に、教育は終始中心的な位置を占めていた」とし、それは農政論においても例外ではなく、「農民の自立を学校教育が推進していくという構想が語られた」と

している⁷⁰。柳田の農業教育論は、後の時代の柳田と比べると値する視点を提供してくれると福井は指摘し、「この時代の教育思想を後の時代と比しての『負』としてではなく、ある明確でたしかな主張をもったものとして位置付け分析していく必要があるのではないか」と提言している⁷¹。ここで福井は、柳田が「教育」という言葉を「広い意味をもったもの」として使っており、「柳田は、農業教育論を広義と狭義とに分けて考えていた」ことに注目している⁷²。すなわち、「広義ノ農業教育」⁷³とは、「農民ノ生活ヲ改善シ其幸福ヲ増加スヘキ一切ノ手段」⁷⁴を与えるものであり、狭義の農業教育とは「年少ノ徒ニ対シテ一定ノ規律アル方法ヲ以テ」⁷⁵行うもの、すなわち「学校教育とほぼ同置できるもの」⁷⁶であった。福井は前者の広義の農業教育について、例として『北国紀行』所収の「越後へ」⁷⁷を取り上げ、農政学期であっても、学校教育に限定し得ない教育の概念を萌芽的ではあるが汲みとることができると考察している⁷⁸。

おわりに

以上のように、教育学における柳田研究から、柳田の教育観の全体を捉えようとする研究を取り上げ、その経過がみえるよう時系列順に概観してきた。改めてその流れをまとめると、次のような現状がみえてくる。

先行研究においては、大まかに把握すると、柳田の教育観を吟味する際、農政学期から視野に入れようとする方針が共有されているように思う。それはつまり、柳田が「教育」という営みの重要性を認識したのは、民俗学創立以降ではなく、より早期の農政学の時代からであると理解されていることを意味する。しかし、そのような長いスパンでの俯瞰を試みると、柳田の学問の変遷に即した一連の流れにおいて、一箇所回避し得ない溝が出現する。それが、農政学期にみられる農業教育観から、郷土研究の創出以降にみられる民俗学的教育観に至るまでの間に生じる隔たりである。現時点においては、この溝を「変化」「転換」とみる傾向にあると

言っても過言ではないであろう。ただし、それを全くの断絶と捉えているのかというと、そう単純な状況でもなく、両者の間には若干の連続性が確認されている。例えばそれは、画一的な教育を批判する姿勢であり、民衆を本位とする姿勢である。また、仮にその溝を大きな「変化」「転換」と捉えた場合、その契機が必ずしも明らかにされていない。柳田が全国を視察して回る中で、各地の農民の状況を目の当たりにしたことをきっかけとするのが一般的であると見受けられるが、その視察において柳田がいかなる衝撃を受けたのか、いかなる決意をしたのか、あるいは、柳田が農政学に感じた教育における「挫折」とはいかなる内容であったのか、その詳細は更なる検討を要すると考えられる。

そうした検討を進める際に大いに参考となるのが、民俗学における先行研究の動向であろう。民俗学においては、1910年代が柳田の「学問」展開における大きな節目とされ、農政学から郷土研究・民俗学への移行は「屈折」「転回」「断絶」「深化」などと様々に評価されている。しかしながら、民俗学において検討されたのはあくまでも柳田の「学問」の展開過程であり、教育観における展開ではない。これまで先行研究で指摘されてきた通り、柳田の教育観の変遷は、彼自身の学問の変遷と密接に関わっている。だが、学問にみられる展開と教育観の展開とを単純に同一視するのではなく、教育観そのものに視点を据えてその展開を捉え直す必要がある。さらに、教育観に関しては、柳田自身の生い立ちも恐らく影響を与えており、柳田の就学時代までも視野に含むことが求められるであろう。

こうした中で、筆者はその「変化」「転換」を、一度「連続」と捉えようとする試みを今後の課題としたい。前述したように、農政学期において目指された教育は、喫緊の課題を抱えていたこと、全国的な規模であったこと、時流に適応することが急がれたこと等を踏まえると、前代教育のともと有さない機能が求められていた可能性が考えられる。そうなれば、柳田がその機能を有する近代的教育を提唱したのは当然のことであり、そ

うであるからといって、前代教育が無益な営みとして見なされたとも言い切れない。当時、そこに「変化」「転換」あるいは「断絶」を見出したとしても、柳田の理想とする教育において何が「変化」し、何が「変化」しなかったのかをより厳密に捉えようとする事により、柳田の教育観がより豊かに描出され得るであろう。その試みは、前代教育の価値を提起しながら近代教育の問題の解決を目指した柳田であるからこそ、彼の思想の流れを把握する上で有意義であると考えられる。

註

¹ 柳田が教育に関して言及した分野は、農業教育に始まり、社会科教育や国語教育など多岐にわたる。例えば、谷川彰英『柳田國男 教育論の発生と継承—近代の学校教育批判と「世間教育」—』（三一書房、1996年）に収録されている「柳田國男・教育関係著作目録」参照。

² 教育学における柳田の習俗研究の有用性を先駆けて提唱した庄司和晃は、次のように評価している。「教育面にことよせていえば、柳田のそれ（柳田の諸論：引用者註）は常民による前代教育の様相を明らかにしたものだといえる。前代の一人前教育のありようを具体的にほりあげたのだ。そしてそこから、前代教育と現代教育、平凡教育と非凡教育、昔の教育と学校教育、旧式教育法と新式教育法、の長短やずれを対比的に剔出し、以前の世の積極面を顧みることの必要性を説いた。……しかも教育の内容面についても、その方法面においても、数々の指針をもたらしている。豊かでさえある」（庄司和晃『柳田國男と教育—民間教育学序説』評論社の教育選書9、評論社、1978年、pp.20-21）。この庄司の研究は、教育学における本格的な柳田研究の契機となり、社会科教育や子ども観等様々な分野においてその進展を促すに至った。

近年では、杉本仁が学校教育を中心として実践的な視野から柳田民俗学を考察した『柳田国男と学校教育—教科書をめぐる諸問題』（梟社、2011年）が出版された。

³ 三倉とは、常平倉（穀物の値を平準化するための貯蔵）、義倉（飢饉に備えるための貯蔵）、社倉（町村が経営する義倉）を指す（柳田國男「日本に於ける農業組合の思想」『時代と農政』（聚精堂、1910年）参照）。柳田は三倉の研究を通じて、住民の自治により管理運営される相互扶助の機関を構想し、その実現を産業組合に期待した。

柳田國男の教育観形成に関する一考察

- 4 柳田國男『最新産業組合通解』大日本実業学会，1902年，『定本柳田國男集』（筑摩書房，1962-1971年，以下『定本』と記す）第28巻所収，p. 3.
また，本稿において柳田の著作より引用する際には，旧字体は適宜新字体に改め，仮名遣いは原文のままとする。
- 5 柳田國男『農業政策学』専修大学講義録，1902年，『定本』28所収，p. 402.
当時柳田は，早稲田・専修・中央大学等で農政学を講じていた。
- 6 岩永久次「教育と社会—柳田國男における教育—」『九州大学教育学部紀要 教育学部門』10，1964年，p. 25。
- 7 同上，p. 26。
- 8 柳田國男「歴史教育の話」『輔仁会雑誌』1940年，『国史と民俗学』（民俗選書7，六人社，1944年）に収録，『定本』24所収，p. 104。
- 9 柳田國男「青年と学問」長野県東筑摩郡教育会講演，1921年，『青年と学問』（日本青年館，1928年）に収録，『定本』25所収，p. 89。
- 10 柳田「食物と心臓」『信濃教育』1932年，『食物と心臓』（創元社，1940年）に収録，『定本』14所収，pp. 231-232。この著書は「餅はもと心臓の形を模したものだらうといふ説」（同上，p. 221）を立ててちょうど10年経たことを記念し，関連する投稿文章をまとめたものだが，巻頭では「当時私たちの唱へ始めた郷土研究，及び一国民俗学の目的と方法」（同上）も投稿時のままに掲載されている。
- 11 同上，p. 232。
- 12 同上。
- 13 1910年代に柳田と南方熊楠との交流が始まり，雑誌『郷土研究』が刊行される。この頃教育における柳田の目下の関心事は「過去忘却が一切の社会害悪の根源」（柳田國男「南方宛1911年7月5日付書簡」飯倉照平編『柳田國男南方熊楠往復書簡』『南方熊楠選集』別巻（平凡社，1985年）所収，p. 58）であるという視点であり，各地で軽視されてきた土着の歴史を今一度顧みようとする試みであった。南方宛の書簡には「社会の新分子が智識に渴し教えられんことを求むることいまのごとく切なる時代もなく，しかしこれに応じて適当なる食物を与えにくきこと今の時代のごときも稀なり」（柳田國男「南方宛1911年10月14日付書簡」同上書所収，p. 153）と記され，柳田は「社会の新分子」である青年たちに，「適当なる食物」として新しい学問によって獲得される知識を提供しようと考えたのであった。こうして学問の改良と青年の主体形成を企図したのが柳田の郷土研究であった。
- 14 前掲，岩永「教育と社会—柳田國男における教育—」，p. 25。
- 15 前掲，庄司『柳田國男と教育—民間教育学序説』，p. 32。

- 16 柳田國男「郷土研究と郷土教育」『郷土教育』27, 1933年, 前掲書『国史と民俗学』に収録, 『定本』24所収, p. 80.
- 17 前掲, 庄司『柳田國男と教育—民間教育学序説』, pp. 32-33.
- 18 柳田國男「歴史教育について」『改造』34巻1号, 1953年, 『定本』24所収, p. 434.
- 19 前掲, 柳田「歴史教育の話」, 『定本』24所収, p. 97.
- 20 同上.
- 21 柳田國男「史学と世相解説」『国史回顧会紀要』27, 前掲書『国史と民俗学』に収録, 『定本』24所収, p. 108.
- 22 前掲, 庄司『柳田國男と教育—民間教育学序説』, p. 33.
- 23 森田政裕「柳田國男の教育論—庶民教育の変遷をめぐって—」岐阜大学教育学部教育学科『岐阜大学教育学・心理学研究紀要』7, 1981年, p. 51.
- 24 同上.
- 25 同上.
- 26 同上.
- 27 柳田國男『郷土生活の研究法』刀江書院, 1935年, 『定本』25所収, pp. 326-327.
- 28 同上, p. 327.
- 29 同上.
- 30 前掲, 森田「柳田國男の教育論—庶民教育の変遷をめぐって—」, p. 52.
- 31 同上.
- 32 同上.
- 33 長浜功『常民教育論 柳田国男の教育観』新泉社, 1982年.
- 34 同上, p. 12.
- 35 同上, p. 122.
- 36 同上.
- 37 横井時敬(1860-1927)は, 1882(明治15)年に福岡県農学校教諭, 1890(明治23)年に東京帝国大学農科大学講師となり, 1894(明治27)年教授に就任, 1911(明治44)年には東京農業大学初代学長となった. 横井の展開した農業教育論は, 当時の農学・農政学の主流をなし, 政策に反映される程の影響力をもっていた.
- 38 森本芳生・齋藤浩志「柳田国男の〈教育〉思想成立試論(I・II)—横井時敬との比較を通して—」神戸大学教育学部研究集録81・82, 1988・1989年.
- 39 同上, 森本・齋藤「柳田国男の〈教育〉思想成立試論(I)—横井時敬との比較を通して—」, pp. 223-224.

柳田國男の教育観形成に関する一考察

- 40 同上, p. 224.
- 41 同上.
- 42 前掲, 柳田『農業政策学』, 『定本』28所収, p. 402.
- 43 柳田國男『農政学』早稲田大学政治経済科講義録, 早稲田大学出版部, 1902-1905年, 『定本』28所収, p. 257.
- 44 前掲, 森本・斎藤「柳田國男の〈教育〉思想成立試論(II)—横井時敬との比較を通して—」, p. 180.
- 45 同上, pp. 179-180.
- 46 同上, p. 180.
- 47 同上, p. 181.
- 48 関口敏美『柳田國男における「学問」の展開と教育観の形成』風間書房, 1995年.
- 49 同上, p. 11.
- 50 同上.
- 51 同上, p. 12.
- 52 柳田國男「義務教育の条件」『教育学術界』63巻4号, 大日本学術協会編集, 1931年. 本誌では「現代諸名士の教育革新論 倍大号」と特集が組まれ, 岡田怡川による編集後記には特集の意義として「教育革新の声しきりとかゝる全国的権威者の教育観を聴き得ることは教育革新に寄与することの大なることを誇るに足ろうと思ふ」と記されている.
- 53 前掲, 関口『柳田國男における「学問」の展開と教育観の形成』, p. 54.
- 54 同上, p. 55.
- 55 同上, p. 56.
- 56 前掲, 柳田『農政学』, 『定本』28所収, p. 260.
- 57 同上.
- 58 同上, pp. 258-259.
- 59 前掲, 柳田『農業政策学』, 『定本』28所収, p. 403.
- 60 柳田は, 「農業労力ノ改良」の国家としての目的を「生産増殖ノ政策トシテ労力ノ効果ヲ増スノ必要アレハナリ」(同上, p. 402)とし, それを達成するには「各個人の能力は著しく不充分なり, 先づ被養成者が自ら到達すべき境涯を知る事能はざるは勿論, 直接誘導の任に当る者と雖, 之に適當なる資格と方法を具ふること稀なり」と, 農民各自による実践力の限界を指摘している.
- 61 柳田國男「農民教育問題」(草稿)1907年, 柳田為正他編『柳田國男談話稿』(法政大学出版局, 1987年)所収, p. 4.
- 62 前掲, 柳田『農業政策学』, 『定本』28所収, p. 409.

- 63 同上.
- 64 具体例として柳田は、当時の小学校及び中学校の普通教育における地理の授業は、遠隔の地への好奇心を煽る内容に偏し、定住すべき農業者にとって不可欠な居所を中心とした地理の知識は無視され、生徒が自身の暮らす村落に興味を覚える機会を失っている点を挙げている.
- 65 前掲、谷川『柳田国男 教育論の発生と継承—近代の学校教育批判と「世間教育」—』, p. 19.
- 66 同上, p. 38.
- 67 同上, pp. 44-45.
- 68 同上.
- 69 福井直秀『柳田国男—社会改革と教育思想』岩田書院, 2007年, p. 5.
- 70 同上. p. 6.
- 71 同上, p. 12.
- 72 同上, pp. 17-18.
- 73 前掲、柳田『農業政策学』、『定本』28所収, p. 403.
- 74 同上.
- 75 同上.
- 76 前掲、福井『柳田国男—社会改革と教育思想』, p. 18.
- 77 柳田国男「越後へ」『北国紀行』1907年, 『定本』3所収, pp. 88-89.
- 78 前掲、福井『柳田国男—社会改革と教育思想』, pp. 37-38.